

くろーず あつが いい もり じょう
クローズアップ飯盛城2023

いい もり じょう あと し
国史跡飯盛城跡を知る

れん ぞく こう ぎ
連続講座

ぜん かい
全4回

だいとうし しじょうなわてし いいもりやま さんちょう いいもりじょうあと こうざ かいちゅう かい げんちけんがく おこな
大東市・四條畷市にまたがる飯盛山、その山頂にある飯盛城跡についての講座です。4回中2回は現地見学を行います。
いいもりじょう はじ ふれ かた くわ し かた たの こうざ
飯盛城について初めて触れる方も、より詳しく知りたい方も楽しめる講座となっています。

だい かい こうざ
第1回：講座

いいもりじょうあと きそちしき
飯盛城跡の基礎知識

れいわ ねん がつ にち にち
令和6年3月3日（日）

ばしょ しじょうなわてしりつれきしみんぞくしりょうかん
場所：四條畷市立歴史民俗資料館

こうし だいとうし しじょうなわてし しよくいん
講師：大東市・四條畷市職員

だい かい げんちけんがく
第2回：現地見学

しせき いいもりじょうあと ある
史跡 飯盛城跡を歩く

れいわ ねん がつ にち にち
令和6年3月10日（日）

ばしょ しせき いいもりじょうあと
場所：史跡飯盛城跡

こうし なかい ひとし し
講師：中井 均氏
しがけんりつだいがく めいよきょうじゆ
(滋賀県立大学名誉教授)



だい かい げんちけんがく
第3回：現地見学

しせき あくたがわじょうあと ある
史跡 芥川城跡を歩く

れいわ ねん がつ にち にち
令和6年3月17日（日）

ばしょ しせき あくたがわじょうあと
場所：史跡芥川城跡

こうし なかにし ゆうき し
講師：中西 裕樹氏
きょうとせんたんかがくだいがく
(京都先端科学大学
とくにんじゆんきょうじゆ
特任准教授)



だい かい こうざ
第4回：講座

いいもりじょう いか
飯盛城は如何にして
天下人の城となったのか

れいわ ねん がつ にち にち
令和6年3月24日（日）

ばしょ だいとうしりつれきしみんぞくしりょうかん
場所：大東市立歴史民俗資料館

こうし あまの ただゆき し
講師：天野 忠幸氏
てんりだいがくきょうじゆ
(天理大学教授)



ていいん にん
定員 30人 (原則4回参加可能な方)

おうぼたすう ばあい ちゆうせん
応募多数の場合は抽選

おうぼほうほう など りめん らん
応募方法等は裏面をご覧ください

かくかい じ よてい
各回とも13～15時予定

げんちしゅうごう かいさん
現地集合・解散

しゅうごうばしょ じかん しょうさい さんかしゃ
※集合場所・時間の詳細は参加者
けつごう し
決定後にお知らせします。



HP

飯盛城跡の考古学調査

1 飯盛城跡の立地

いもりじょうあと
飯盛城跡は、大東市と四條畷市にまたがる飯盛山（標高 314.4 m）の山頂を中心に築かれた戦国時代末期の山城跡です。飯盛城跡が築かれた飯盛山は生駒山地から派生する支脈の北端部、四條畷市と大東市の境に位置しています。飯盛山の地質・岩体の大部分は花崗岩類かこうがんいで形成されています。



飯盛城跡近景 南西から

飯盛山の東斜面は緩傾斜の地形となり、山麓には山間部の室池むろいけを水源とする権現川ごんげんがわが流れています。権現川は北麓でその流れを南西に変え、低地部で寝屋川ねやがわと合流しています。西斜面は東斜面とは対照的に生駒断層崖によって急傾斜となっており、谷筋を流れる中・小河川によって形成された扇状地性の段丘が山地の西縁に分布しています。西麓の標高約 10 m 前後には東高野街道ひがしこうやかいどうが南北に縦走し、大和に通じる街道として北麓に清滝街道きよたきかいどう、南麓に中垣内越道なかがいでごえみちが東西に通ります。飯盛城が機能した 16 世紀後半には東高野街道の西側に深野池ふこのいけや新開池しんかいいけなどの湖沼が広がっていました。

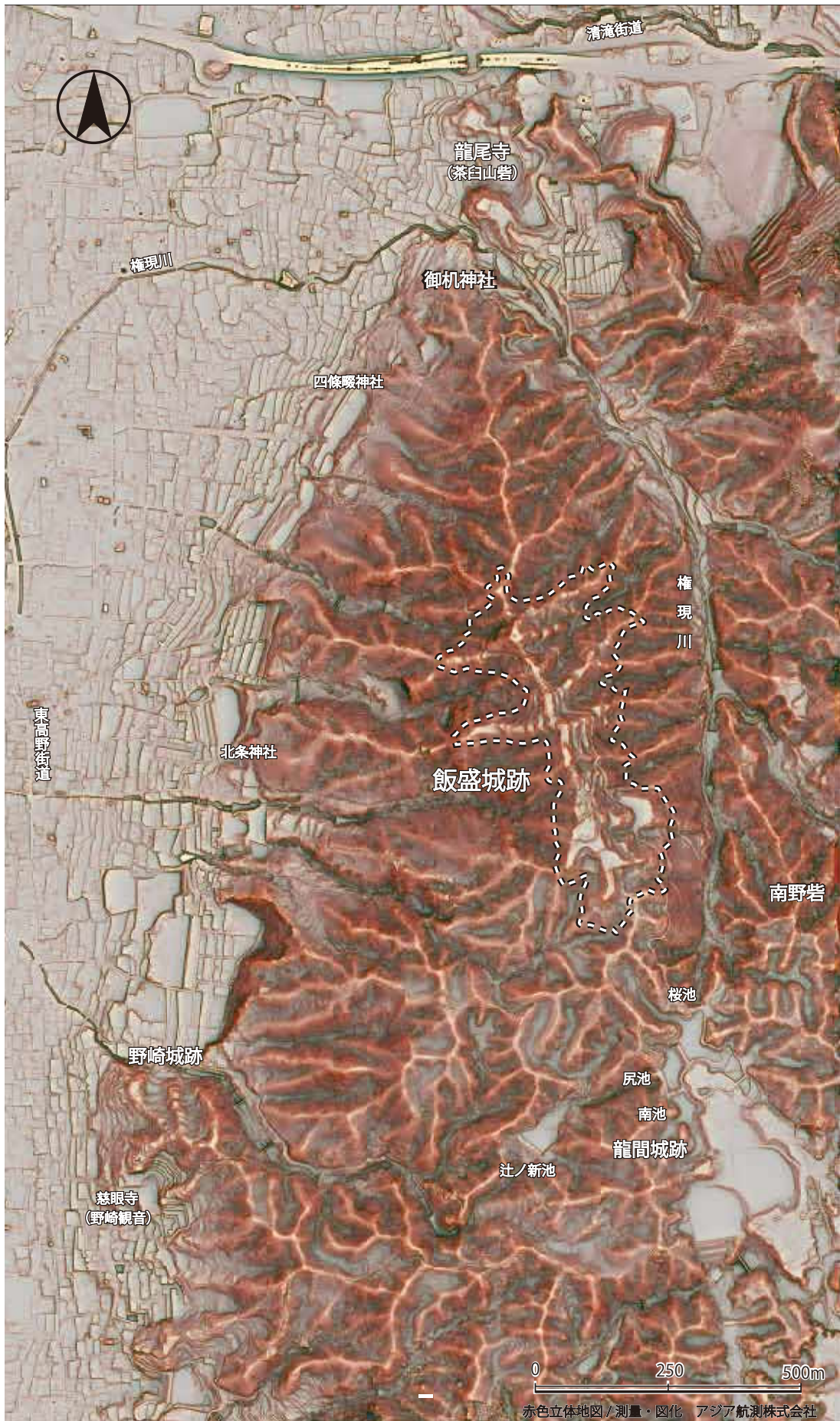
2 飯盛城跡周辺の関連遺跡

飯盛城の周囲には本城である飯盛城を守るため支城が築かれました。支城の機能を有したとみられる城には、飯盛城の東を守る狼煙台としての機能が推定される南野砦みなみのとりで、長谷遺跡はせいせき（四條畷市）の北西に存在した可能性のある権現山砦ごんげんやまとりで、西には深野池さんがに存在した三箇の島のぎきじょうに築かれた三箇城さんがじょう、東には大和への街道沿いを抑える田原城たわらじょう、北田原城きたたわらじょう、南方を守る野崎城のぎきじょう、龍間城たつまじょう、北方を守る忍岡古墳しのぶがおかこふんを城郭化した岡山城おかやまじょう、土砂採取で消滅した清滝山きよたきやまに存在したとされる清滝城きよたきじょう、現在は龍尾寺りゅうびじが建つ茶白山砦ちやうすやまとりでが挙げられます。

飯盛城の南方を守る野崎城と龍間城は、平成 28 年度に実施した航空レーザ計測の成果によって遺構の現状が明らかになり、曲輪等の城郭遺構が残っていることが判明しました。

3 飯盛城跡の研究史

飯盛城跡は地元においては江戸時代以降、南野村みなみのむらと北条村ほうじょうむらの水論すいろんに関する絵図くるわと石垣が描かれるなど古城跡として認識されていたことが窺われます。城跡の本格的な調査は、昭和 5 年頃の大阪府史蹟調査会に同行した旧制四條畷中学校の教諭であった平尾兵吾ひらおひょうごを皮切りに、大阪府立四條畷高等学校地歴考古学クラブによる発掘調査や本田昇氏ほんだのぼるや中井均氏なかいひとし、中西裕樹氏なかにしゆうきなどによる縄張り調査が行われ、飯盛城跡研究の基礎となりました。また、近年は文献史学の視点からも仁木宏氏にきひろしや天野忠幸氏あまのただゆきにより飯盛城跡の研究が進められており、三好政権と飯盛城の関わりを紐解く作業が進められています。



赤色立体地図 飯盛山とその周辺

4 遺構の分布と構造

分布調査で確認された城郭遺構

曲輪 114 箇所、土塁 4 箇所、堀切 12 箇所、^{たてぼり} 堅堀 20 箇所、石垣 40 箇所

城域

東西 400 m、南北 700 m

城の構造

主尾根上に I 郭（高櫓郭）から X 郭（馬場）^{ばば} が構えられ、北側の主尾根から東西に派生する支尾根には小曲輪群^{しょうくるわぐん}が築かれています。

I 郭（高櫓郭）の南側には主尾根を遮断する堀切（堅堀 4・5）が構えられており、この堀切で城の機能を分けています。

北エリア 主尾根上に I 郭（高櫓郭）から VI 郭が構えられており、各曲輪は面積が狭く、曲輪間の比高が大きくなっています。宗教的な性格を持つ可能性のある V 郭（御体塚郭）^{ごたいづかかく}の北には城内でも最大の堀切が構えられており、この堀切によって城の主要部分は隔てられていると見られます。主尾根から東西に派生する支尾根上には曲輪群 A から曲輪群 F が構えられており、西側は自然地形の急傾斜、東側は多重堀切（堀切 3・5～11）として城域を限っています。また、各曲輪の斜面には多くの石垣が築かれています。

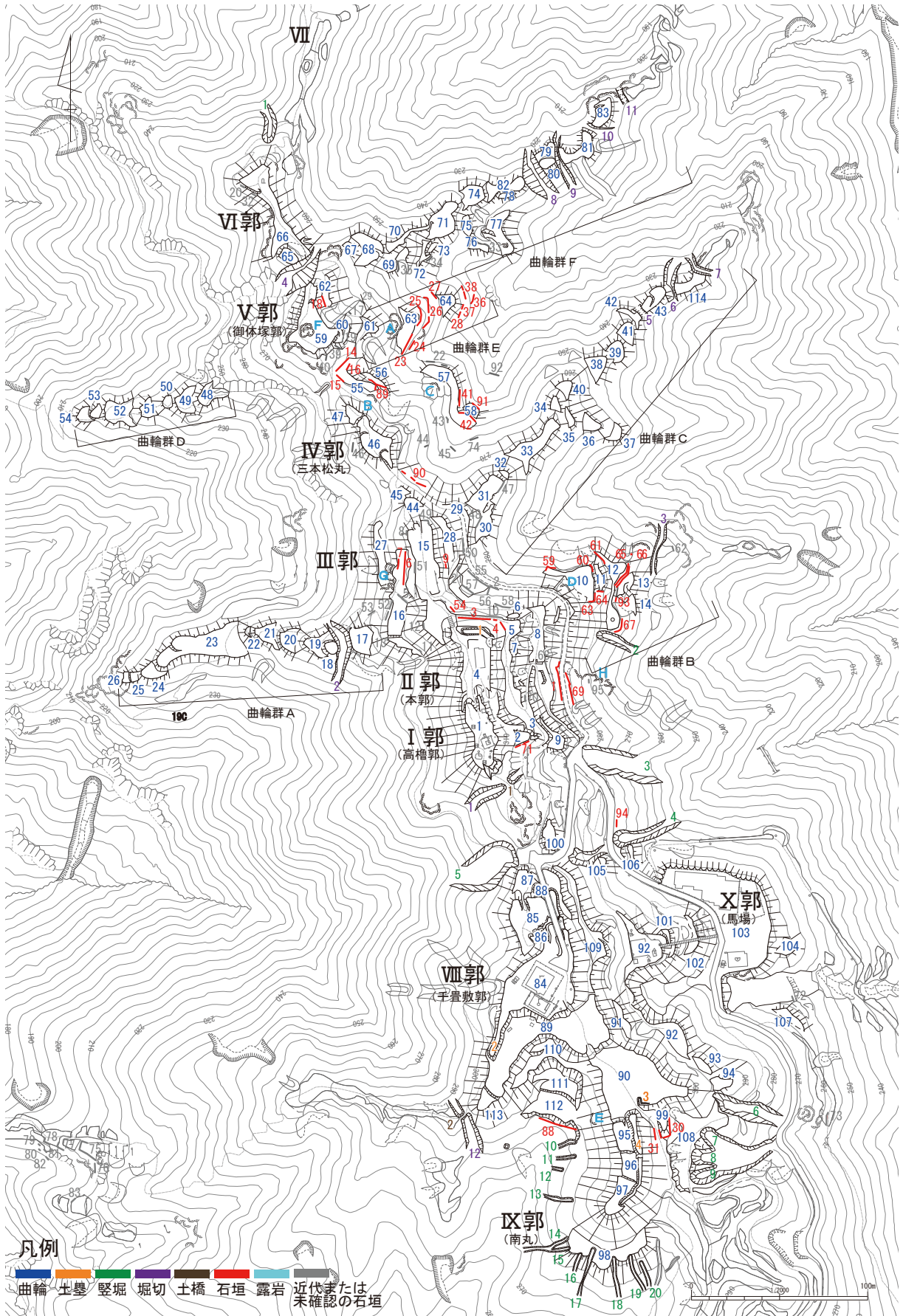
南エリア VIII 郭（千畳敷郭）^{せんじょうじきかく}・IX 郭（南丸）^{みなみまる}・X 郭（馬場）で構成されます。広大な面積を持つ曲輪が多く、傾斜の緩やかな東斜面には帯曲輪や腰曲輪が多く構えられています。北エリアと比較すると曲輪間の比高は小さくなっており、支尾根に曲輪群は築かれていません。IX 郭の切岸^{きりぎし}の下には畝状空堀群^{うねじょうからほりぐん}が構えられています。石垣は虎口^{こぐち}と VIII 郭の谷に築かれた曲輪斜面のみであり、北エリアと比較すると非常に少ないといえます。

虎口 IX 郭の東側には東西に石垣が築かれた虎口が構えられています。いわゆる平入^{ひら入り}の虎口で複雑な折れなどは見られませんが、石垣の間の通路は西に湾曲しており、VIII 郭全体を直接見通せないようになっています。虎口の東には曲輪 99、西には曲輪 95、正面には曲輪 90 が位置しており、侵入してきた敵を両側面と正面から攻撃することができる曲輪配置になっています。また、飯盛城跡には曲輪群 E の南方に石垣 41 と石垣 42 が築かれています。石垣 41 には 2 m を超える大きさの巨石^{かがみいし}が使用されており、鏡石と考えられます。石垣の間も開口しており、登城道と考えられる石垣 89 の上を通り V 郭へ至る城道^{しろみち}が想定されることから、東側の虎口である可能性が考えられます。

5 飯盛城の石垣

城域内で確認された飯盛城に伴う石垣 30 箇所

石垣の分布 北エリアの東斜面に集中していることがわかります。特に V 郭と曲輪群 E、I 郭（高櫓郭）・II 郭（本郭）^{ほんかく}と曲輪群 B に多くの石垣が集中して築かれている半面、西斜面にはあまり築かれていません。東斜面には権現川からの登城道の存在が推定されており、虎口とともに人の往来が多い箇所であったと考えられます。石垣は多くの人を通る登



飯盛城跡遺構現況図

城道や虎口から見える位置を選んで築かれたと考えられます。

石垣の特徴 石垣は自然石を垂直に近い勾配で積んだ野面積み^{のづらづ}で、排水機能を高めるために石垣の背面には栗石^{ぐりいし}が充填されているものもあることが分かりました。石垣は勾配が垂直に近くなるほど高く積むのが難しくなります。そのため、飯盛城では一段目の石垣を積んだ後に平坦面^{こうばい}を設けて二段目を積む段築状石垣^{だんちくじょういしがき}とし、高く見せる工夫がされています(石垣1・69、石垣6・7、石垣23・24)。段築状となっている石垣は石垣6・7のように急傾斜地に築かれたものが見られます。これは地形的に崩れやすい場所の石垣を段築状とすることで高く見せると同時に構造を補強したと考えられます。延長の長い石垣では、崩れるのを防ぐために隅角部(出角(石垣69))が構築されています。

石垣石材 石垣を観察してみると石材に割った痕跡は認められません。分布調査を進めるうちに多くの石垣のそばに露岩^{ろがん}が存在していることが分かりました。花崗岩は節理^{せつり}と呼ばれる自然の割れ目が発達しています。露岩の節理の間隔が付近に位置する石垣石材の大きさと近いことから、節理を利用して近くの露岩から石材を採石したと考えられます。



段築状の石垣 (石垣 23・24)
写真：四條畷市教育委員会蔵



出角のある石垣 (石垣 69)



石垣 6・7 北西から



石垣 1 北から



飯盛城跡近景 南西から



飯盛城跡近景 北東から

V 郭北側 堀切 4
南東から



虎口
南から



I 郭（高櫓郭）南側
土橋 1 北から



V郭（御体塚郭）とその周辺の調査成果について

村上 始

(四條畷市教育委員会 スポーツ・文化財振興課)

1 御体塚郭（曲輪 59）の位置と特徴

この曲輪は城の北部に位置しており、城域北部では最高所の標高 287 m に位置します。この曲輪から北へ 17 m 程下ると幅約 15 m の堀切に至ります。

この曲輪の平面形態は菱形状で、その特徴は、曲輪の中央やや西寄りに花崗岩が盛り上がった様に露出（露岩）していることです。本来、曲輪はその機能から造成にあたって切り土や盛り土工事を行い、全体を平坦にしますが、城内ではこの曲輪のみ意図的に旧地形のまま中央に岩盤が残されています。



またこの露岩の西側の平坦面は狭く、その先は急斜面となっていることから、城が機能していた当時は西麓から露岩が見えていたと思われます。

V郭（御体塚郭）
写真：四條畷市教育委員会所蔵

2 御体塚郭（曲輪 59）と周辺の調査成果

平成 28（2016）年度にこの曲輪の北東斜面に築かれた石垣 18 の測量調査を行った際に瓦が出土したことから、平成 29（2017）年度は、石垣 18 の上方の平坦面に長さ 3 m の L 字形の第 1 トレンチと 3 × 3 m の第 2 トレンチを設定し発掘調査を実施しました。

その結果、両トレンチにおいて、上面が平らな建物の柱を立てるための礎石そせきの可能性がある花崗岩が、整地層せいちそうの上に設置されているのを確認しました。また第 2 トレンチでは、多量の土師器皿はじきさらや土師器台付灯明皿はじきだいつきとうみょうざら、瓦質土器播鉢がしつどきすりばちとともに、銅銭どうせん、輸入磁器ゆにゆうじき、平瓦ひらがわらや丸瓦まるがわら、雁振り瓦がんぶり、塼せん、壁土かべつち、鉄釘てつくぎなどが出土しました。この調査成果からこの曲輪に建物が存在していたことが考えられたため、平成 30（2018）年度は、その確認を目的として、第 2 トレンチの南側に第 3 トレンチを設定して調査しました。

その結果、塼列建物せんれつたてもの（塼貼建物せんばりたてもの）に伴う塼（瓦に似た四角形の板状の焼き物）が直線状に設置された状態で出土しました。塼列建物とは、建物の土壁の裾に塼を貼り巡らせた建物です。塼の配置状況から建物の規模は、最大約 4 × 6 m に復元できました。

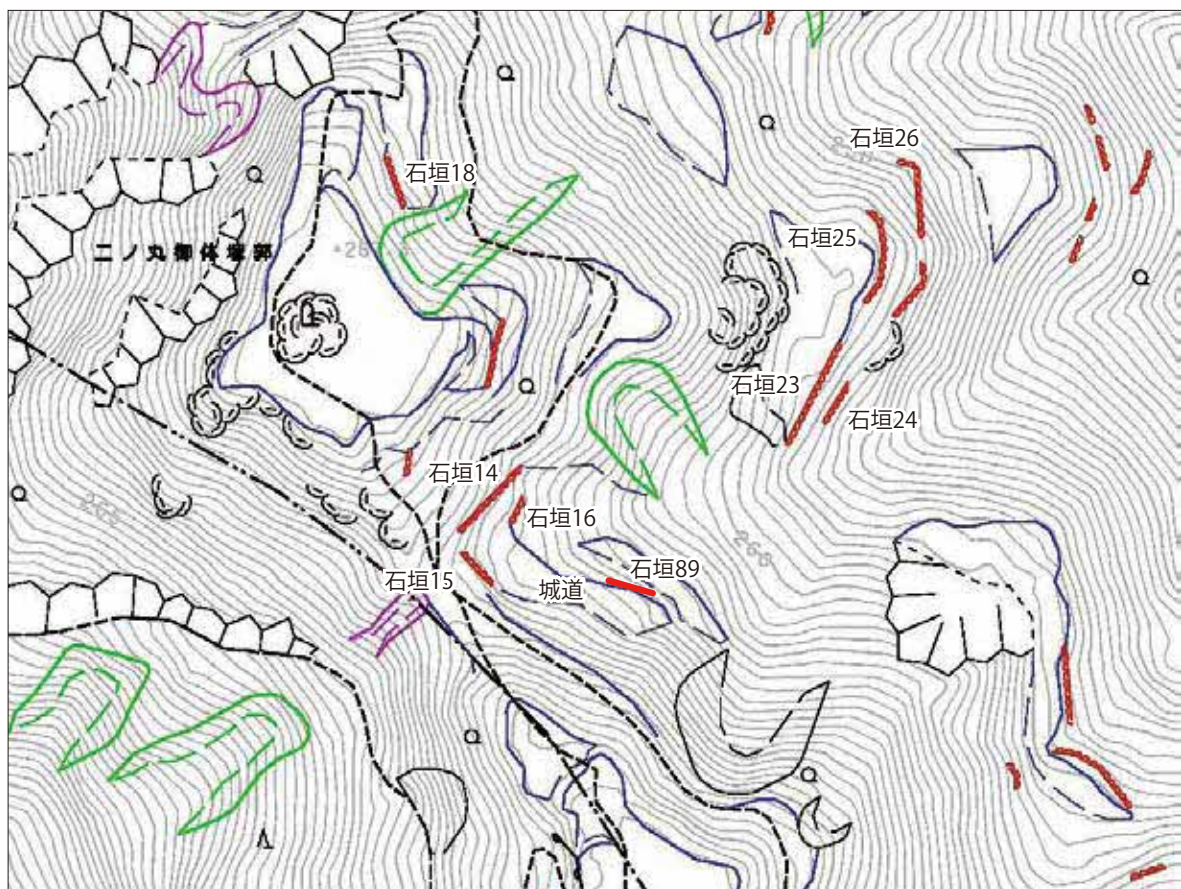
また塼列建物跡の北側において、それと同じ配置方向に並ぶ建物の基礎の可能性のある石組遺構を確認しました。

塼列建物は堺環濠都市さかいかんごうとしなどの遺跡で確認されており、その多くが土蔵どぞうとして使われたと

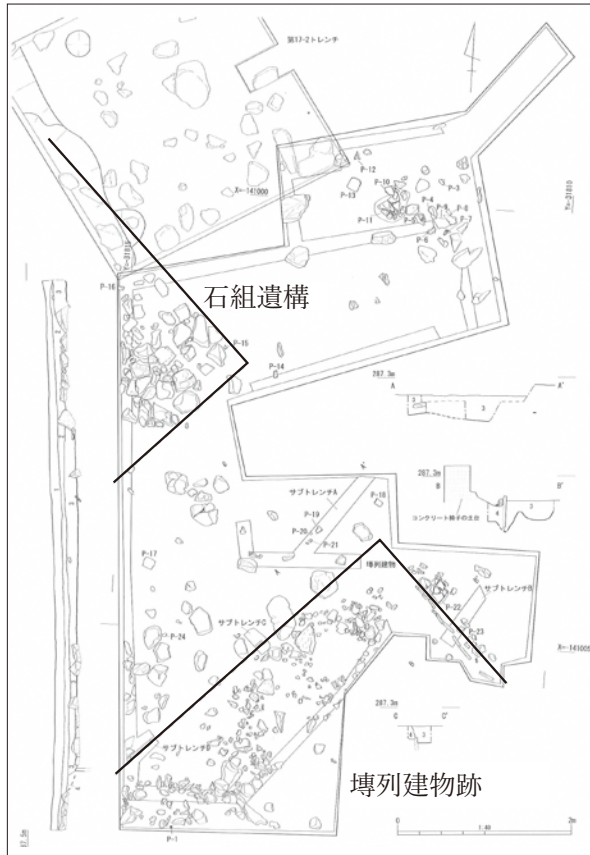
考えられています。しかし今回の調査では瓦の出土数が少なく、瓦は棟のみに葺かれていた可能性が高いことから、耐火構造が求められる蔵と想定することは難しいと考えています。このことから、この建物は置塩城（兵庫県姫路市）などで類例のある櫓である可能性が考えられます。

また石組遺構は、礎石列建物や礎敷建物と呼ばれる石組みの基礎構造をもつ建物の一部である可能性が考えられ、その機能については平成 29 年度の調査において、この建物の東側から宗教的な特異な用途が想定される土師器台付灯明皿が出土していることから、特殊な役割の建物であった可能性が考えられます。

このように平成 28 (2016) 年度から平成 30 (2018) 年度まで御体塚郭を中心とした場所を調査した結果、まず御体塚郭には少なくとも 2 棟の建物が建っており、そのうち 1 棟は櫓と想定される博列建物、もう 1 棟は宗教的な用途の建物であったと考えます。また石垣測量調査の結果、当時は御体塚郭の北から東・南側斜面に石垣が巡らされており、その東側尾根を中心とした曲輪群には、その斜面に数段におよぶ石垣が嚴重に築かれ、またその間には虎口のひとつと考えられる所からの城道しろみちが通じている壮大な曲輪群であることが判明しました。



御体塚郭と周辺の石垣



御体塚郭 遺構平面図



石組遺構出土状況
写真：四條畷市教育委員会所蔵



塙列出土状況
写真：四條畷市教育委員会所蔵



土師器台付灯明皿（中列中央）
 瓦質土器搗鉢（後列左）
 輸入磁器（前列）
 土師器皿
 写真：四條畷市教育委員会蔵



雁振瓦（左）、丸瓦、平瓦
 写真：四條畷市教育委員会蔵

3 三好長慶と御体塚郭

天野忠幸氏は、長慶は永禄3年（1560）11月に飯盛城へ入城直後に、唯一神道を受け継ぐ公家の吉田兼右に、三好家の祖先である源義光が社頭で元服した由緒をもつ園城寺の新羅善神堂（新羅社）を勧請するための作法と費用を尋ねていると指摘されています。

また中井均氏らが指摘されている、観音寺城（滋賀県近江八幡市）、小谷城（滋賀県長浜市）、小牧山城（愛知県小牧市）、岐阜城（岐阜県岐阜市）、安土城（滋賀県近江八幡市）などのように、城郭が巨石や磐座が所在する信仰の地に築かれていることがあるという点から、御体塚郭の露岩も同様に磐座信仰に関連すると考えられます。

以上のことと調査成果から、御体塚郭にはそれらに関する建物が建てられた宗教的な場所であったと考えられます。

長慶は永禄7年（1564）7月4日に死去し、そのことは隠された『細川両家記』に記されています。このことから、宗教的な性格がある御体塚郭が、遺体を仮埋葬（安置）した場所との伝承につながったのではないのでしょうか。

VIII郭（千畳敷郭）・IX郭（南丸）・虎口の調査成果について

李聖子（大東市）

1 VIII郭（千畳敷郭）・IX郭（南丸）の位置と特徴

VIII郭・IX郭は居住空間が想定される南エリアに位置しています。VIII郭（千畳敷郭）は南エリアでは最高所に位置しています。飯盛山FM送信所の建つ曲輪が最も高いところに築かれた曲輪で、標高は約310mを測り、主尾根上に築かれた曲輪と東側の帯曲輪、谷部に築かれた曲輪で構成されます。



VIII郭（千畳敷郭）からIX郭（南丸）を望む

IX郭（南丸）はVIII郭の南側、城域の最南端に位置します。南に向かって低くなる3段の曲輪で構成されており、東縁辺には約33mに及ぶ土塁が築かれ、南側の切岸には畝状空堀群が構えられています。IX郭の東側には東西に石垣が築かれた虎口が位置しており、城の南側を防備していたと考えられます。

2 VIII郭（千畳敷郭）の調査成果

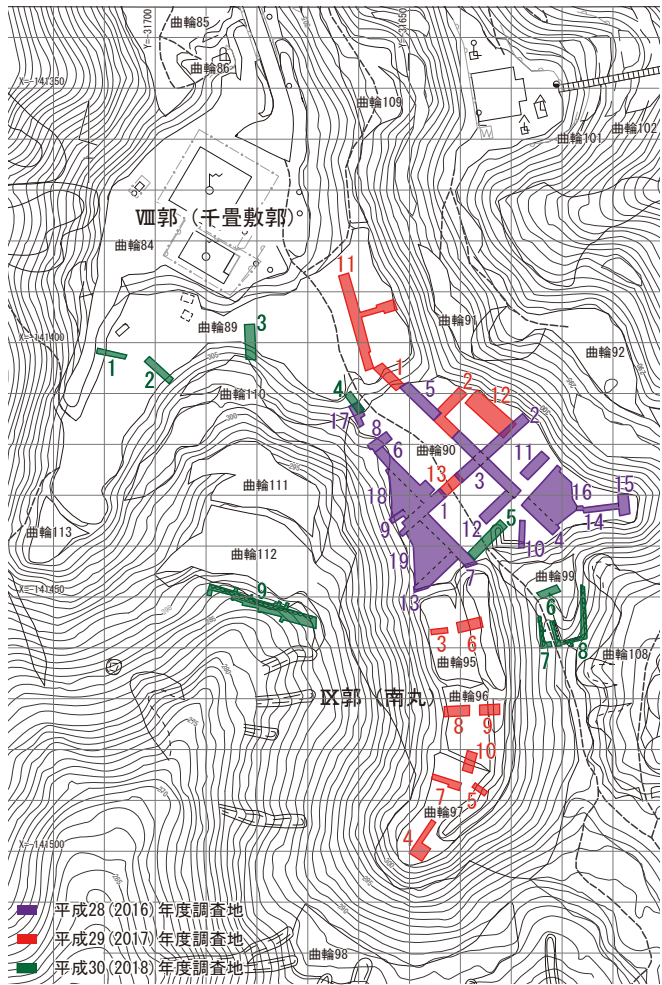
居住空間が想定されるVIII郭では、平成28年度から平成30年度にかけて曲輪の上に建てられていた建物を確認するため、曲輪89と曲輪90の発掘調査を実施しました。調査の結果、^{さくじ}作事の遺構として、岩盤を掘り込んで据えた建物の柱を支える礎石を発見しました。建物の規模を確認するには至りませんでした。壁土が出土していることから、礎石立ちの土壁建物の存在が推定されます。また灯明皿として使用された土師皿や調理具、茶道具などが出土しました。曲輪90の18-5トレンチでは、^{れき}礫が発見されています。トレンチの東側には土塁3、西側には土塁4が位置し、トレンチを設定した場所は曲輪へ入る開口部となっています。このことから曲輪90の虎口であり、発見された礫は虎口を補強するための^{れきじき}礫敷であった可能性が考えられます。

^{ふしん}普請の遺構では曲輪を造成する^{もりど}盛土の遺構を確認しました。盛土は深いところでは約2m盛られている箇所もあり、もとはやせ尾根であった山頂を削り、その土を斜面に盛る大土木



VIII郭 礎石検出状況

工事により曲輪の面積を確保したことが明らかになりました。また、谷部分に築かれた曲輪の斜面からは石垣が発見されました。全長が約22mある直線状の石垣で高さは最大で約4mを測ります。虎口以外の石垣が確認されなかった南エリアで石垣が発見されたことで城域全体に石垣が取り入れられてた本格的な石垣づくりの城である可能性が高まりました。



VII郭・IX郭トレンチ配置図



VII郭(千畳敷郭)曲輪 90 18-5トレンチ 北東から



曲輪 112 18-9トレンチ 石垣 88 南東から



曲輪 90 17-2トレンチ 曲輪を造成する盛土

3 IX郭（南丸）・虎口の調査成果

IX郭（南丸）では、土塁の構築状況と曲輪の造成を確認するために発掘調査を行いました。調査の結果、作事の遺構として曲輪97の西端で礎石を発見しました。礎石は焼土層で覆われており、焼土の中からは大量の壁土と茶道具の風炉の破片、犬形土製品や土師器皿などが出土しました。最南端に位置する曲輪97の南端では直径約1mを測る建物の柱穴を3基発見しており、この建物跡は復元すると柱間2.1mの1間×1間の方形の櫓であった可能性が考えられます。曲輪97の17-10トレンチでは炉床とみられる遺構やトリベが見つっています。トリベの内側には鉄が付着していることから、小規模ながら鉄の鋳造が行われていたと見られます。



IX郭曲輪96・97 17-5(左)・17-7(右)・17-10(手前)トレンチ全景

普請の遺構としては、Ⅷ郭と同様に曲輪を造成する盛土の遺構を確認しています。IX郭の土塁は岩盤を削り出して作られており、この切土の際に出た土を曲輪を造成する盛土として利用したと推察されます。

IX郭の東に位置する虎口では、東西に築かれた石垣の規模と虎口に伴う施設を確認するために調査を行いました。調査では虎口に伴う門などの施設は確認されませんでした。石垣30が曲輪99の斜面を取り巻くように築かれていることが明らかになりました。また、根石が築く石よりも前にせり出して据える顎止め石となっていることを確認しています。



曲輪97 17-4トレンチ 柱穴検出状況



曲輪95 17-6トレンチ 土塁



曲輪97 17-7トレンチ出土 壁土



曲輪96 17-10トレンチ出土 トリベ



虎口 石垣 30 南西から



石垣 30 (曲輪 99 東斜面)



石垣 30 顎止め石(曲輪 99 南斜面)



虎口 石垣 31 東から

4 調査成果からみたⅧ郭・Ⅸ郭

飯盛城に三好長慶^{みよしながよし}が居住していたことは文献にも記されており、広く知られていました。また、中井均氏は縄張り研究から城の南エリアが居住空間として機能していたことを指摘しています。

Ⅷ郭で実施した発掘調査では、礎石と日常生活用具、茶道具が発見されたことで、従来より指摘されてきた居住空間であったことが考古学調査からも裏付けられたといえます。また、長慶は飯盛城でたびたび連歌会を催していたことが分かっています。その会場となった建物は広大な面積を持つⅧ郭であったと推察されます。居住空間であり政治の場でもあったⅧ郭のすぐ南に虎口が位置するという構造上、畝状空堀群を備え、櫓が建てられていたⅨ郭が南エリアの防御を担ったと推察されます。

発掘調査で確認した普請の遺構からは、やせ尾根であったところを大規模な土木工事によって広い面積を持つ曲輪を造成し、本格的な石垣を築いたことが明らかになりました。調査成果からは三好氏が持つ高度な土木技術と政治戦略の一端をうかがうことができます。

飯盛城跡の歴史的価値

測量調査と分布調査で明らかになった飯盛城跡の城域は（東西 400 m、南北 700 m）西日本有数の規模を誇ります。また、以前より指摘されていたように北エリアは防御空間、南エリアは居住空間として機能していたことが調査成果からも想定されます。多くの曲輪の周囲には石垣が築かれており、石垣は城の全域に分布していることも明らかになりました。

石垣については飯盛城跡を特徴づける遺構であり、戦国時代末期の石垣構築技術や年代を特定できる貴重な事例であるといえます。発掘調査では、礎石が出土し瓦が発見されたことから石垣・礎石建物・瓦を導入した城郭であることが分かりました。調査成果から飯盛城跡の歴史的価値は以下の4点にまとめることができます。

- ・戦国時代末期の重要な政治拠点・文化交流の場として機能したこと
- ・戦国時代末期の城郭遺構が良好に残存し、城の機能が推定できること
- ・戦国時代末期の山城における石垣の使用と構築技術を示す貴重な事例であること
- ・石垣・礎石建物・瓦を導入した城郭であること

飯盛城跡は織田信長によって完成される「織豊系城郭」に先行して石垣・礎石建物・瓦の3つの要素を取り入れた稀有な事例であり、城郭史上の画期に位置づけられる戦国時代末期の時代の変化を考察する上で、重要な遺跡といえます。

今後の課題と保存・活用の展望

飯盛城跡は飯盛山のハイキングコースの一部に組み込まれています。休日は府内外からも多くのハイカーが訪れ、国史跡指定後には城跡を見学する方も増加しています。

遺構の保存では石垣が崩れていたり、人の往来の増加により遺構面が傷んでいる箇所が散見されます。遺跡を見学するにあたり、立地が山ということもあり遺構の保全と見学者の安全確保に努める必要があります。

史跡の活用では、ハイキングコース沿いには飯盛城跡の関連遺跡である龍間城跡や野崎城跡、その他の遺跡も立地しており、飯盛山とその周辺の自然環境が一体となった遺跡の保存・活用方法を検討していく必要があります。



四條畷学園校舎屋上から飯盛山を望む

【参考文献】

- 中井均 1981 「飯盛山城」『日本城郭大系』12巻 大阪・兵庫 新人物往来社
- 小野正敏・五味文彦・萩原三雄 編 2011 『中世人のたからもの』高志書院
- 仁木宏、中井均、中西裕樹、NPO 法人摂河泉地域文化研究所編 2015 『飯盛山城と三好長慶』戎光祥出版
- 天野忠幸・高橋恵著 2016 『三好長慶、河内飯盛城より天下を制す』風媒社
- 大東市教育委員会・四條畷市教育委員会 2020 『飯盛城跡総合調査報告書』
- 中世学研究所 編 2020 『城と聖地』高志書院
- 實盛良彦 2021 「飯盛城跡出土の台付皿と「御体塚」」『中世土器研究』141号 中世土器研究会
- 高槻市 2021 『芥川城跡 - 総合調査報告書 -』

飯盛城関連年表

- 1530(享禄3)頃 細川晴元被官・木沢長政、飯盛城を居城とする。
- 1531・32(享禄4・5) 畠山義堯、木沢長政の飯盛城を攻撃。
- 1536(天文5) 木沢長政、飯盛城から信貴山城(奈良県平群町)にうつる。
- 1537(天文6) 木沢長政、畠山在氏を河内守護に擁立。飯盛城は守護所となる。
- 1542(天文11) 木沢長政、遊佐・三好・本願寺と戦い、太平寺(柏原市)で敗死。ついで両軍が飯盛山麓で衝突。
- 1543(天文12) 木沢の残党、飯盛城から大和方面に退く。
- 1551(天文20) 安見宗房、河内下郡代となり飯盛城に入城。
- 1552(天文21) 安見宗房、飯盛城内で酒宴にことよせて萱振賢継を誅殺。
- 1559(永禄2) 安見宗房、高屋城に進出するが、長慶に攻められ飯盛城に退却。
- 1560(永禄3) 三好長慶、高屋城(羽曳野市)の畠山高政を破り、安見宗房を追放して河内を占領。芥川城(高槻市)から飯盛城に入る。
- 1561(永禄4) 三好長慶、飯盛城で連歌会(飯盛千句)を催す。
- 1562(永禄5) 三好長慶、飯盛城で安見宗房や根来寺衆を迎え撃つ。
- 1564(永禄7) 宣教師ガスパル・ヴィレラや日本人修道士ロレンソ了斎、飯盛城で三好長慶の家臣73名を洗礼。
三好長慶、飯盛城で弟の安宅冬康を殺害。
三好長慶、飯盛城で死去。養子の義継が家督を継ぐ。
- 1565(永禄8) 宣教師ルイス・フロイス、飯盛城を来訪。
三好義継、飯盛城から高屋城にうつる。
- 1567(永禄10) 飯盛城、三好義継に対抗する三好三人衆の手にわたる。
- 1568(永禄11) 三好義継、將軍足利義昭から飯盛城を安堵される。
- 1569(永禄12) 三好義継、飯盛城から若江城(東大阪市)にうつり、飯盛城城郭としての機能を失う。

■用語解説

くるわ
曲輪城郭における基本的な居場所。多くの場合内部を平坦化して、周囲に対しては防御施設によって守る

おびぐるわ こしぐるわ
帯曲輪・腰曲輪：この2つの言葉は厳密な意味での使い分けはないが、基本的に曲輪斜面にこれを囲うように長く設けられたものを帯曲輪、短くポイントに設置されたものを腰曲輪という

るいせん
塁線：土塁・切岸・石垣によって城域を遮断するライン

きりぎし
切岸：曲輪斜面を防御するために人工的に加工を施した斜面

どるい
土塁：曲輪の縁辺部に土盛をして防御壁とした施設

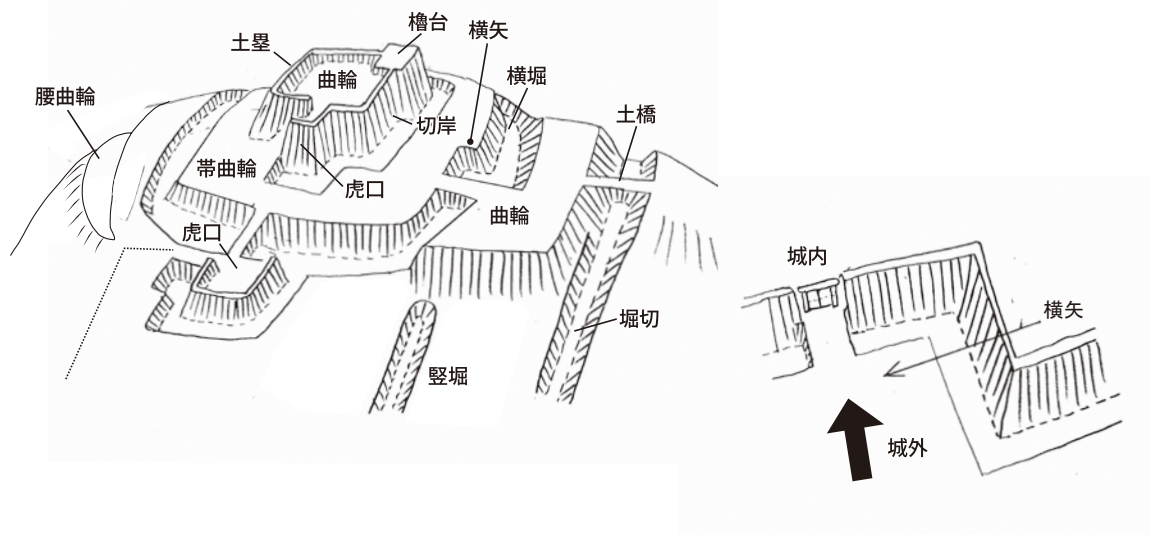
ほりきり
掘切：尾根筋を分断する堀を言う。山の弱点となる尾根伝いに侵入する敵を防ぐために設けたもの

たてぼり
堅堀：丘城・山城などの斜面に設けられた空堀で、等高線に対して直角に掘られた堀

よこぼり
横堀：山城で曲輪の側面（斜面側）にも巡る堀のこと。発達したものでは城全体を囲み、城域を区画するものもある

こぐち
虎口：城の出入口とこれを守るための施設のこと。城では出入口を攻められることが弱点となるので、虎口と称して厳重に守った。虎口は単に出入口の門のみをいうのではなく、出入口の周囲の施設も含めて呼ぶことがある。城内へ直進で入るものは平入虎口という

よこや
横矢：城内に侵入する敵に対して、側面から攻撃することを可能にした守るための施設。図のように、虎口側面の曲輪を張り出せば、虎口に向かう敵を側面から攻撃できる



県政 150 周年記念事業特別展『兵庫山城探訪』兵庫県立考古博物館 2018 より転載